
お嬢様のアパート生活

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様のアパート生活

【Nコード】

N1887Y

【作者名】

s i n n eーキヨノリ

【あらすじ】

引っ込み思案な少女、平野癒事は、桜の花畑と言うアパートに住み、様々な友人を増やしていく。
世話焼きな姉真理、謎の多い少女有歌、幼馴染の少年しゅうれ。
癒事は沢山の人との出会いで変わっていく。

ピアプロにて主人公癒事の別の話も書きます。

第一話：桜の花畑（前書き）

始めまして、s i n n eです。

小説初投稿になります（ピアプロ抜くと）

変な文章ですが、よろしくおねがいします。

第一話：桜の花畑

「お父様。何の御用でしょうか？」

「癒事^{ゆず}。お前に、アパートをやる」

「あばーと？それは何でしょうか」

「そうか、お前はアパートを知らないか。アパートとは、そうだな・
・。行って見れば分かるさ」

「はい。分かりました」

「そして、お前は、其処に住むのだ」

「分かりました。お父様」

私の名前は平野癒事^{ひらのゆず}。

音楽会社である平野家本部。

そう、お父様はその会社の社長なの。

私は、もうすぐ礼音学園^{れいおんがくえんこうとうがく}高等部の一年生。

それを期に、お父様は私にアパートを渡し、一人暮らしするように
言っている。

「ちよつと、癒事。ゆゝずゝっ!!!!」

「お姉さま？」

「癒事。あれでいいの？」

この人は私の姉。平野真理^{ひらのまり}。

「うん、何か、皆で生活って、面白そうだし」

一人暮らしと言っても、普通の一人暮らしではない。

アパートに人を入れて、皆で暮らす。

それがお父様が、引っ込み思案の私をどうにかしようと決めた事らしい。

「でも、大丈夫？ほら、貴方、人と話すの苦手じゃない。私が居なくて大丈夫なの？」

「・・・それは・・・」

「ほら、無理じゃない。私も行くから。今から荷物をまとめて、いくわよ」

「はい」

「ここが・・・アパート・・・」

私は、其処おどろについて驚いた。

「私の家より小さいです・・・」

「それがアパートだからね。私は、住民集めに行くわ。貴方が住民を集められるわけないし。うーん、じゃあ、貴方は、アパートの中を探検してみたら？」

「は・・・はい・・・」

そう言っ、お姉さまは外へ出て行った。

「これが・・・アパート・・・」

庭には桜の木が立っている。

まだ花は蕾つぼみだ。

家は三階建て。

それに一階に食堂と大浴場がある。それも男女両方の分。

「お姉さまは、此処で待っていてと言っていました、少し、外に出ましよう」

私は、庭から外に出ようとした、その時。

「あー！ねえねえ、貴方、このアパートの管理人さん？」

一人の少女に話しかけられた。

「は・・・はい・・・一応・・・」

「へえー、私、ここに住んで良い？」

「はい・・・！貴方の・・・名前は何？私の・・・名前・・・は・・・」

「名前は何？」

「えっと・・・平野・・・癒事・・・」

「平野！？あの音楽会社の娘さん？」

「え・・・あ・・・はい・・・」

「へえ、凄い！でも、何でその音楽会社の娘さんが？」

「色々・・・あって・・・」

な、何話したら良いんだろう・・・この人、何歳かな・・・。

「あ、ごめんごめん。忘れてた。私の名前は小川^{おがわ}有歌。宜しくね」

「有歌・・・さん・・・」

「ねえ、貴方何歳？」

「16・・・」

「なら、私と同じ年じゃん。有歌でいいよ。私も、癒事って呼んで
良い？」

「はい・・・！」

「ねえ、このアパートの名前は？」

「アパートの名前・・・」

このアパートの名前は・・・。

「桜の、花畑」

第一話「桜の花畑」

第一話：桜の花畑（後書き）

登場人物

平野癒事

16歳 女

4月9日生まれ。

引っ込み思案。

平野真理

25歳 女

8月29日生まれ

世話焼きな癒事のお姉さん。

小川有歌

16歳 女

12月24日生まれ

元気な少女。謎が多い。

第二話：幼馴染とか友達とか（前書き）

主人公の幼馴染登場！

第二話：幼馴染とか友達とか

「桜の花畑さくらのはなばたけかあ・・・良い名前だね！」

有歌ありかは私にそう言った。

「そ・・・そう？」

「うん！あ、そうだ。私、早速荷物まとめてくるから、じゃ、またね！」

「え・・・あ、うん」

こうして、このアパートに第一入居者だいいちにゅうきよしやが出来ました。

「癒事ゆず」

疲れた様子でお姉さまが来ました。

「あ、お姉さま。どうしたんですか？疲れた様子ですが・・・」

「入居希望者にゅうきよきぼうしやが誰も居なかったのー！！！！」

「は・・・はあ・・・」

「んもう！！ねえ、癒事。入居者どうする？」

「えっと・・・一人・・・友達・・・出来た・・・」

私がそう言うと、お姉さまは驚おどろいて。

「ええっ!!この引っ込み思案の癒事が友達を作った!!!!!!??」

「う・・・うん・・・一応・・・」

「しかも、入居者に!？」

「うん・・・・・・」

「良かったじゃない癒事!!うわ、我が妹が成長したわ!!!!」

お姉さまは物凄い喜んだ様子。

「で、で?その子はなんていうの?いつアパートに来るの?」

「えっと、その子の名前は小川有歌。おがわありか私と同級生なの。もうすぐ来
ると思うけど・・・」

「癒事!!!!」

「有歌!」

「癒事が・・・一日で友達を作って・・・しかも・・・名前で呼び
合うなんて・・・」

お姉さまは相当驚いてる。そこまで驚く事なのかな・・・?

「癒事、そっちの人は?」

「あ、私のお姉さま、平野真理^{ひらのまり}」

「へえ、癒事のお姉さんなんだ。始めまして」

「は、始めまして・・・」

お姉さまはまだ半分くらいの魂が途方に暮れてるみたいだった。
本当に其処まで驚かれると引くんですが・・・。

「あ、そうだ。ねえ、有歌」

「何？癒事」

「有歌って、学校何処に行くの？」

「あ、言ってなかったっけ？礼音^{れいおん}学園だよ」

「ええっ!？」

「そうだったの!？へえ・・・私も・・・礼音学園だよ・・・」

「そうなんだ！じゃあ、入学式一緒に行こう!」

「う・・・うん」

「私も青春したいな」

お姉さまはそんな事を言ってた。
何か別の意味で途方に暮れてる・・・。

「青春って、真理さん、まだ若いじゃないですか。これから相手も見つかりますよ！」

「そう・・・かな・・・」

更に落ち込んでる様な・・・。

「じゃ、じゃあ・・・有歌、ちょっと・・・外の桜でも見に行こうか・・・夜桜も・・・結構・・・良いと・・・思うんだ」

私は流石にちょっと可哀相だと思い、ちょこっと助けを入れる。

「あ、うん！」

そしてお姉さまは隅っこに蹲り、何かブツブツ喋っていた。

「ふーっ、夜桜も結構良いよね」

「う・・・うん・・・」

「お、癒事じゃねえか!!」

其処に、男の子が居た。

「しゅうれ・・・君・・・!」

「何々、知り合い？」

有歌が茶化すように言う。

「知り合っているか・・・幼馴染・・・かな・・・」

「癒事、そっちの子は？もしかして、友達か？」

「う、うん・・・」

「良かったじゃねえか！癒事！」

しゅうれ君は、嬉しそうに言う。

「うん・・・」

「仲良いじゃないの♪」

第二話幼馴染とか友達とか

第三話：入学式前日談（前書き）

学園物のくせにまだ学校生活始まってないという・・・。
早くしなければ。

第三話：入学式前日談

「な、仲良いつて・・・有歌ありか・・・しゅ、しゅうれ君はただの幼馴染だよ・・・」

「た、ただの・・・」

あれ？しゅうれ君なんか落ち込んでる？

「ふくん、そうなんだ。ねえ、貴方も礼音学園れいおんがくえんに入学するの？」

しゅうれ君を無視して有歌は話を続ける。いいのかな・・・？

「しゅうれ君も、私と同級生で、礼音学園に入学するんだっけ？」

「あ、ああ・・・で、癒事ゆずがアパートに住み始めるって言ってたから、俺も、アパートに住もうかな・・・と」

「家出してきたの？」

いつの間にやら、お姉さまが来ていた。

「い、家出？」

「ゆ、癒事、これは違うんだ。断じて家出などしていない！」

「そうかな」

私と有歌がしゅうれ君を見る。

「ま、真理まりさあゝん・・・」

「自業自得」

しゅうれ君はお姉さまに助けを求めてるけど、あしらわれてる・・・。

「で、しゅうれ君。家出って？」

「あ、ああ。それはな、姉貴から逃げてきたんだよ」

「へえゝ、しゅうれ君にも、お姉さんって居るんだゝ」

「それがな、とんでもない姉貴なんだよ」

「あ・・・か、かいなさんですね・・・」

そう、私も、しゅうれ君のお姉さんには会ったことあるから、これは私も分かっている。

本当に、あの人は・・・。

「しゅうれゝ♪探したわよゝ。もう、愛しの癒事ちゃん追いかけて此処まで来ちゃってゝ。ねえゝ癒事ちゃゝん。弟君はどうしたのかなゝ？此処に居ないっばいけどゝ」

噂をすればなんとやら。

この人がしゅうれ君のお姉さん。

実石みせきかいなさん。

結構酒癖の悪いお姉さんで、私やお姉さま。しゅうれ君を巻き込ん

で、色々騒動を起こしている。

「へえ、癒事にも、弟が居るんだ」

「癒糸ゆいとは・・・ちよつと家出・・・じゃなくて、旅に出て・・・」

「っていうか、姉貴来るの早すぎんだよ!!」

「え、だって、真理さんに場所教えてもらったんだもん」

「半分脅されて・・・ね・・・」

本当に、かいなさんには誰も逆らえないんです・・・。

「ま、でも、アパート暮らしも面白そうだからって、お父さんも許してくれたけどね、♪私の働きに感謝しなさいよ」

「か・・・感謝します・・・」

しゅうれ君は、ちよつと引きながら言う。

まあ、アパートが明るくなるから良いと思うけど。

「あ、癒事。入学式、今週の水曜日でしょ。もうすぐだから、今のうちに生活リズム整えておいてね」

「はい」

もうすぐ。入学式です。

第三話「入学式前日談」

第三話：入学式前日談（後書き）

弟居たんだくですよね。

ちなみに双子の弟です。

しゅうれの年齢は16歳。癒事と同じだから。
かいなさんの年齢は20歳。

第四話：入学式の前に・・・（前書き）

主人公の話し方が安定しない罨WW

第四話：入学式の前に・・・

今日は、入学式です。

「癒事ゆず！いやー。やっぱり制服似合うわー」

「そ、そう・・・かな・・・？」

「うんうん！癒事は制服似合うって！」

私は、今、礼音学園れいおんがくえんの正門の前に居ます。

「有歌も・・・制服・・・似合いますよ・・・」

「そう？でもー。やっぱり癒事可愛いーっ！」

「きゃっ！」

いきなり有歌ありかが抱きついて来た。

「うんうん。青春してるねー」

「あれ？癒事の彼氏さんは？」

「かかか・・・彼氏・・・じゃ・・・ないです・・・・・・・・！！！」

「照れてるてれてるー♪」

／／／

「よっ、癒事」

「\$%&am p;,%#&am p;,#%#%\$#%#”\$#”\$%#
%\$#%#%#&am p;,%#%#!!!!???”」

「癒事」。言葉になってないわよ」

な、何でてんぱってるのかな？うう。よくわかんない。

「もう、有歌ちゃんも、癒事をあまりからかわない方が良いわよ。
あの子。結構人の言った事全部呑み込んでうんだから」

「は～い☆」

「????」

しゅうれ君一人、何も分かってないみたい。

「なく、癒事。一体何があったんだ？」

／／／

しゅうれ君が私の方を向いて聞いてきたけど、なんとなく恥ずかしくて、そっぽを向いてしまった。

「??????」

「しゅうれ。今は乙女の間だから、しゅうれは私と一緒にあつそびましょ～♪」

しゅうれ君の後ろにかいなさんが居る。

そして、しゅうれ君を連れて―（正確には振り回して）行ってしまった。

絶対・・・よってますね・・・。

「癒事。落ち着いた？」

「は、はい・・・」

「ごめんね。癒事がそんなにこういう話に弱いって知らなかったから」

「むむむ」

「さーと、もうすぐ入学式始まるから、行きましよう」

「え、しゅうれ・・・君は・・・」

「あ」

完全に忘れてましたね・・・。

第四話「入学式の前に・・・」

第四話：入学式の前に・・・（後書き）

やっと学校編始まりました！

これから癒事の学校での友達やアパートの住民も結構増えていきます。

第五話：初めての入学式はお嬢様には分からない言葉があったようです（前書き）

あれ？サブタイが前回とかより長い。

入学式の前振り長すぎましたWWW

第五話：初めての入学式はお嬢様には分からない言葉があったようです

「ひ、酷い目にあった・・・」

「だ・・・大丈夫・・・？しゅうれ君・・・」

入学式前、かいなさんがしゅうれ君を振り回していました。

「はあ、かゝいゝな。入学式なのに、酒呑んでるの！！」

なんだか、かいなさんは酔っていたそうです。

「いやゝ、だってさゝ？しゅうれの晴れ姿見てたら、つい」

「話が・・・噛み合って・・・ません・・・」

何故、晴れ姿を見たらお酒を飲みたくなるのでしょうか？
よく分かりません。

「ぎくっ」

「はあゝ、もう時間が無いから、早く行きましょう」

「はゝい」

今から入学式です。

この、礼音学園高等部の・・・。

「今から、礼音学園高等部の入学式を始めます。まず始めに・・・」

「今から、校歌斉唱です」

「次に、生徒会長挨拶です」

「どうも、生徒会長の弓樹澄乃ゆみきすみのです」

「では、礼音学園関係者からの式辞を読み上げます」

話長い……。これって、確か、お姉さまの言ってた入学式の醍醐だいご味ごみだっけ？

私は、いつも学校には行けず、家で勉強をしていたから、学校に来るのは初めて。

そう、この入学式も、この制服を着るのも、全てが”初めて”だった。

「ず……。癒事！もう入学式終わったよ！」

「ふえ？……。えっと……。もう……。ですか……。？」

お父様の話と比べれば、此方の方が短く思えました。

それほど、お父様の話は長かったのでしょうかね。

特に長かったのは入学する時、一人暮らしや学校についての話です。

「もうって……。結構長かったよ……」

しゅうれ君が呆れ気味に言う。

「でも……。結構疲れましたね……。眠いです……」

私がそう言って、有歌は、次にこう言いました。

「とりあえず・・・教室に行こう、癒事」

この時、私は、皆にとってごく普通の事を聞いてしまったようです。

「きょーしつって・・・なんですか？」

私が聞くと、しゅうれ君と有歌は勿論、周りに居た人達まで私の方を向いた。

「も・・・もしかして・・・癒事・・・。教室も分からないの？」

「は・・・はい・・・。学校に・・・入学する事・・・自体・・・初めて・・・ですので」

「そういえば・・・癒事のお父さんが、親馬鹿だったな・・・」

また意味の分からない言葉が・・・。

「んもうっ！とりあえず、教室に行くよ。行けば分かるから」

行けば分かる・・・？よく分からずに、私は有歌に引かれて行った。

第五話「初めての入学式はお嬢様には分からない言葉があったようです」

第五話：初めての入学式はお嬢様には分からない言葉があったようです（後書き）

もう前振り長すぎて入学式の内容自体は短くなっていましたww
生徒会長さんはこれから癒事達に絡んできます。

第六話：初めての教室（前書き）

最近更新してなかった・・・。
仮面ライダーに集中しすぎたぜ！

第六話：初めての教室

「これが・・・教室ですか？」

私は有歌ありかに訊きました。

「うん、そうだよ、癒事ゆず」

初めて見る光景に、私はドキドキしました。

「これが、学校」

「ほら、癒事。席に座って」

「え？は、はい・・・」

私は、近くの椅子に座りました。

そして、担任の先生の紹介がありました。

「はじめまして、私の名前は光李夢こうりむです。今日から一年。宜しくお願ひします」

「私は、副担任の秋野ユカあきのです！主に体育担当です！」

李夢先生は落ち着いていて、ユカ先生はなんだかハキハキしている。特にユカ先生が体育教師なのは納得です。

「じゃ、まずは、クラスの皆で自己紹介しましょうか。では、右側の人から願ひします」

そして、自己紹介が始まった。

「小川有歌です。宜しく願いします！ちなみに、趣味は友達つくりです！」

「はじめまして、私は参条菜香さんじょうさいかです。宜しくね」

「えっと……、平野……癒事です……。よ、よろしく……です……」

皆の前で自己紹介というのは私にとっては初めてだ。此処には、私にとっての初めてが沢山ある。皆にとっては普通であろう。

私の席は、前に畑菜理はたけさいりさん。

隣に有歌。後ろに菜香さん。菜香さんの隣は空いている。ちなみに、しゅうれ君も同じクラス。一応、私の弟の癒糸ゆいとも同じクラス……。だけど、まだ癒糸は戻ってきてない。

「癒事。隣の席になれて良かったね」

「う、うん……」

私は、笑って有歌と話をしていた。

有歌と居ると、とても楽しいのだ。

菜香さんは、外を見てぼーっとしていた。

菜理さんは、隣の人と友達になれたのか、それとも、元々友達なのか、楽しそうに話していた。

しゅうれ君は、中々仲良くする事が出来ないのか、周りの男子から

浮いてるように見えた。

「はあ……」

菜香さんが、溜息をついていて、私は、少し心配になったので、つい話しかけてしまいました。

「あの……どうされたんですか？」

「え？あ、ううん。何でもないの。ごめんね、心配かけて……えっと……」

「癒事です。こっちは、友達の有歌」

「こんにちわ。じゃないね。何か、浮かない顔してるね」

「うん、昔、っていうか、ほんの数年前なんだけど、私の友達。真まこと空理真くうりまことって子がね、此処に通ってたの」

「そうなんだ」

有歌は驚いたように言う。

「そしてね、私が、此処に行きたいって思ったきっかけだったの。でもね、真は、事故にあって亡くなったの。私は、ここに受かったのは良いんだけど、此処に居ると、その友達を思い出して悲しくなるんだ。ごめんね、入学初日から、重い空気にさせちゃって」

「良いんです。私達が、訊いたので。友達……ですか……」

私は、友達を亡くした時、どういう風に悲しむのでしょうか。とても想像したくないです。

「私は、今まであまり外にも、学校にすら行った事無いので、友達が居なかったんです」

「そしてね、私と出会ったの」

「初めて出会った時は、私は何故か、自然と話せたんです。何だか、この人とは、友達になれそうだって。何だか、菜香さんとも、友達になれそうです」

私がそういうと、菜香さんはこういいました。

「うん、有歌ちゃんとも、癒事ちゃんとも、友達になろう！でも・・・私の事は、菜香って呼んでね」

「うん！」

「はい・・・！」

入学初日。一人、友達が増えました。

第六話：初めての教室（後書き）

何故に真空理を出してしまった・・・。

まあ、ピアプロとかのと同じような世界観って思っただけです（分からない人は分からなくて良いですが）。

菜香さんは友達を亡くしています。その友達がああなってるとも知らずに・・・。

真って何歳だろう・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1887y/>

お嬢樣的アパート生活

2011年11月20日21時42分発行